Y01a　ふれあい天文学:11 年目の挑戦 -参加者アンケートから分かること-

縣 秀彦, 藤田登起子（国立天文台）

国立天文台の教育・アウトリーチ事業ふれあい天文学が 11 年目を迎えた 2020 年度も 64 名の国立天文台職員参加により実施された。コロナ禍の下、従来通り学校に研究者が直接伺う出前授業形式のほか、初めて Zoom 等を用いたオンラインでのリモート授業形式でも実施された。リモート授業では旅費が発生しないため、国外からの申し込みが可能となり、全国の小中学校 69 校のほか、海外日本人学校等の在外教育施設 30 校でも実施可能となった。この中には聾学校、特別支援学校、夜間中学も含まれる。海外は小・中学生合同のケースが多くすべてオンラインでの実施であった。国内でも小学校中学校が併設されている 3 校は小中合同で実施された。リモート授業形式を取り入れることとなり、従来の出前授業形式と比べ、参加者の理解度や満足度等に差が出ないかを調べるため、参加する児童生徒に直接、事後アンケート調査を実施した。授業実施後にウェブ・フォームまたは紙で回答する数項目の簡単な調査である。出前とリモートとの間で授業の楽しさの印象は、顕著な差はみられなかった。一方、また天文学者とふれあいたいと全体の 9 割の参加者が希望していることが分かった。ただし、授業が難しいと回答した参加者ほど希望しない傾向がみられた。自由記述の中には改善が可能なコメント等もあり、2021 年度実施では改善策を講じる予定である。